

発達障害のある児童生徒を対象とした小集団型感情理解プログラムの効果と課題に関する文献的検討

○岬 和希* 丹治 敬之*

(岡山大学院教育学研究科)*

KEY WORDS: 発達障害 感情理解プログラム 小集団プログラム

(目的)

近年、発達障害のある児童生徒（以下、発達障害児と略す）に対して情動面の問題へのアプローチが注目されている（藤野 2013）。発達障害児の多くは自己感情の理解とコントロールが苦手であることが多くの研究で指摘されている。これらの特徴は対人関係のトラブルや社会的不適応行動の原因になりやすく、社会性の問題につながると言われている（宮地ら, 2006）。そういった発達障害児の情動面への問題に対して自己感情の理解やコントロールスキルの獲得を目的とした研究が行われている。そこで本研究は先行研究から自己感情の理解、コントロールを目的とするプログラムを実施した文献を対象とし、その効果と課題の分析を目的とする。

(方法)

発達障害児に向けて感情理解プログラムを実施した文献の中で、小集団実践が行われている文献を対象としてレビューした。論文検索サイト CiNii で「感情理解」「感情コントロール」「発達障害」「情動調整」でキーワード検索し、その中で小集団実践が行われており、過去 10 年以内に発表された文献を 10 編、収集した。対象事例数は 57 名となった。

(結果)

1. 対象児の認知能力

対象児の認知能力は平均～平均以上に該当する対象児が 57.9% であり、平均より低い対象児が 17.5% であった。計測結果がない対象児が 24.6% であった。使用した知能検査や発達検査が異なり、単純に比較することは難しいが、認知機能が平均以上の対象児がほとんどを占めていた。

2. プログラム内容

調査文献全 10 編のうち感情理解のみを標的としてプログラムを実施した文献は 5 編あり、感情のコントロールまでを標的とした文献は 5 編あった。感情のコントロールを標的とした文献のうち感情理解に効果があった文献は 5 編、感情のコントロールまで効果があった文献は 3 編であった。

3. 評価方法

事前事後テストでの評価が 7 編、逸話的報告が 6 編、ワークシートの結果による評価が 4 編あった。事前事後テストでの評価には、尺度を用いて評価を行った文献が 5 編あり、マトソン年少者社会的スキル尺度を用いた評価が 1 編、児童用不安尺度を用いた評価が 1 編、スペンス児童用不安尺度を用いた評価が 1 編、ソーシャルスキル尺度を用いた評価が 2 編あった。

4. プログラム以外の場面への活用

プログラム以外の場面（例：家庭や学校）で学習したスキルを用いる機会（宿題など）を設定されていた文献は 4 編あった。

(考察)

認知機能が平均以上の対象児が多く選定されている点であるが、感情理解は感情の生起場面の想像や、自己分析することが求められる。よって、ある一定以上の認知機能が必要となると考えられる。次にプログラム内容では、感情のコントロールまでを標的とした文献の 5 編で、まず感情の理解を進め、感情をコントロールするスキルを身につけるプログラムへの移行していた。しかし、感情理解は身についたが、感情コントロールが身につけていない文献が数編存在した。小集団での実施であるため、個人の困っている場面と仮想場面として設定された場面との違いが原因ではないかと考えられる。評価方法については、調査した文献のうち半数が尺度を用いない逸話的報告やワークシートでの結果での評価を行っていた。また、用いられていた尺度も技能や行動を計測する尺度がほとんどであった。しかし、小中学校での認知行動療法の実践においては、心理的な面での尺度が多く用いられている。発達障害児を対象としたプログラムにおいても心理的な尺度での評価が必要であると考えられる。プログラム以外の場面での活用についてはプログラムで学んだスキルを他の場面で使用する機会を設けている文献が少なかった。そういった機会を設定するためにフォローアップでの追跡調査を行うことや、学んだスキルを家庭や学校で使用する練習を含めたプログラムを実施することが必要であると考えられる。

(MISAKI Kazuki, TANJI Takayuki)